

立川町

THK

# 早坂台遺跡

調査説明資料



昭和 55 年

山 形 県

立川町教育委員会

## 目 次

1. 早坂台の位置	1
2. 遺跡の環境	1
3. 調査の経緯	2
4. 調査の概要	
(1) 調査の方法	3
(2) 出土した遺構	6
(3) 出土した遺物	6
5. 調査のまとめ	7

## 挿図・図版目次

第1図 遺跡位置図	1	図版1 出土した土器・石器のいろいろ	8
第2図 土層図	2	図版2 土器の出土状況 出土した大石皿	9
第3図 発掘地区分布図	3	図版3 石器の出土状況 住居跡の出土状況	10
第4図の1 住居跡平面図	4	図版4 遺跡の遠景	11
第4図の2 住居跡平面図	5		

## 調 査 体 制

遺 跡 名	早坂台遺跡	遺跡番号 1692 (山形県遺跡地図)
所 在 地	東田川郡立川町大字肝煎字早坂……他	
期 間	自昭和55年7月14日 ~ 至昭和56年3月31日	
	現地調査 昭和55年7月14日 ~ 9月22日	
	現地説明会 昭和55年9月22日	
調 査 主 体	山形県 立川町教育委員会	
調 査 担 当		
調 査 担 当 者	調査員 八木藤太	
	事務局 今田幸雄 (社会教育係長) 富樫恒文 (社会教育主事)	
	阿部金彦 (教育委員会主事) 石川精一 (立谷沢公民館主事)	
	作業員 12名 (男5名・女7名)	

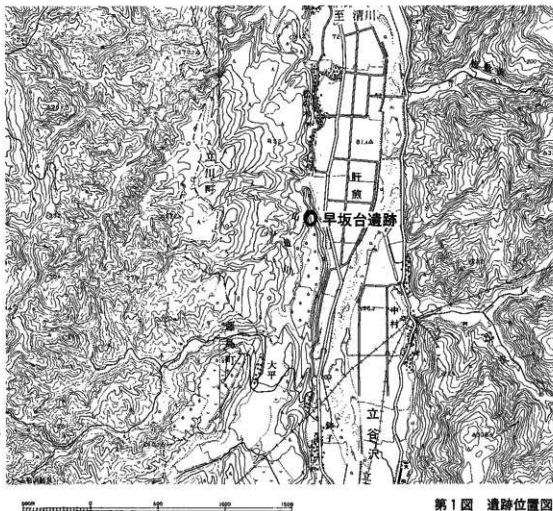
※ 表紙 発掘調査風景

## 1. 遺跡の位置

当遺跡は、山形県東田川郡立川町大字肝煎字早坂に位置する。陸羽西線清川駅より主要地方道立川・羽黒山線を立谷沢川左岸に沿って南に進むこと約6km、松の木部落南方の右手に遺跡のある台地の下に達する。

## 2. 遺跡の環境

遺跡は、立谷沢川の河岸段丘面に立地したものである。段丘面は標高127mで南北500m、東西約100mのほぼ西に50分の1傾いた平坦面であり、東端は約40度の段丘崖に約37mの比高をもって立谷沢の谷底平野に落ちており、西端は約20mの段丘崖で山造川の溪谷にのぞんでいる。



第1図 遺跡位置図

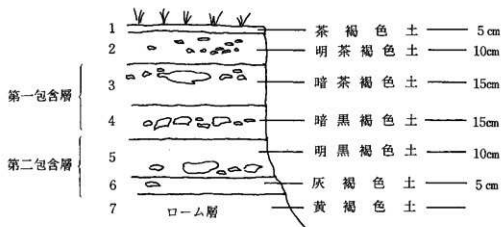
段丘面は約7万㎡で1.5m～2mの火山灰に覆われ、表面から30cm～1.2mは黒ボクの状態に風化し、下層は粘土化し帯水層となりわずかに西に傾いているので、段丘面の北西部は三千谷地と呼ばれる湿地帯となっており湧泉がある。水温は夏でも14℃である。火山灰土は風化が進み、地表面から図のごとく7つの土層に分けることができる。地表より約30cmに第1包含層、約40～50cmに第2の包含層が認められる。但し黒ボクが浅く、約30cmの地点は第1層の包含層しか認められない。この火山灰土は東北地方に広く分布する輝石安山岩質のものといわれ、酸性が強い。

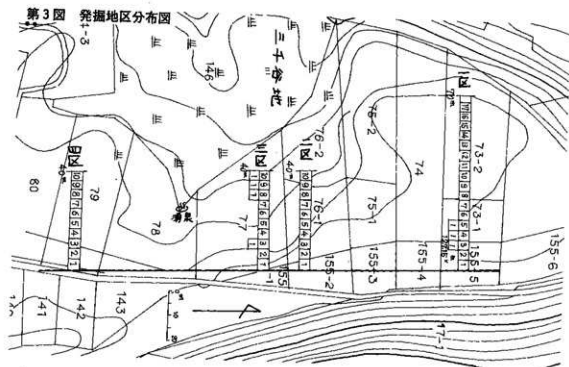
当遺跡の東は段丘崖下に立谷沢川の谷底平野があり、川を越えて高さ約700mに達する深い山地の出羽山地があり、西は山造川の小溪谷を越えて高さ約200mの日蔭含山(ひげくらやま)、米山、鉢巻山を経て羽黒山(419m)に達する広い山地となっている。また、この遺跡の南方に続いて同一高度の須辺野台、四本松台の河岸段丘があり、北には精進場台、十文字台、七曲台、木の根坂、大平の高位段丘が立谷沢川左岸に数珠状に分布し、いずれも縄文時代の遺物を出土している。

### 3. 調査の経緯

当遺跡は、かつて松の木部落の草刈場として利用されていたのであるが、その後、杉の植林が行われ昭和24年に戦後の食糧増産の国策によって強制的な開墾が行われた。当時の植林は60年にも達する見事な林相であったのが、約1年位にして食糧増産の畑に姿を変え

第2図 土層図





た。この頃、畑作業をしていた部落民の間から矢の根石が出るという声伝わり、関心のある人々の手によって採集が行われた。昭和50年に県教育委員会による町内の埋蔵文化財調査が行われ、遺跡の分布状況が再確認されている。

昭和53年、水田の基盤整備事業完了後、水田からの砂利採取が行われ、これに山土で補填しようという計画になり、土砂の採取を早坂台に求めたのである。早坂台の北端近くは細長い尾根によって西と東の斜面に区分された地形であり、遺跡からは離れていたのであるが、いずれ土砂採取が遺跡にかかることは当然であり、遺跡の予備調査が行われた。土砂採取が遺跡まで80mと近づいたので、今回の緊急発掘調査実施となった。

なお、この調査は県教育委員会文化課、庄内埋蔵文化財調査室の指導を受けながら、地元松の木部落はもとより鳥海砂利(株)、(株)斎藤組、小林建設(株)、絶大なる協力のもとに行われたものである。

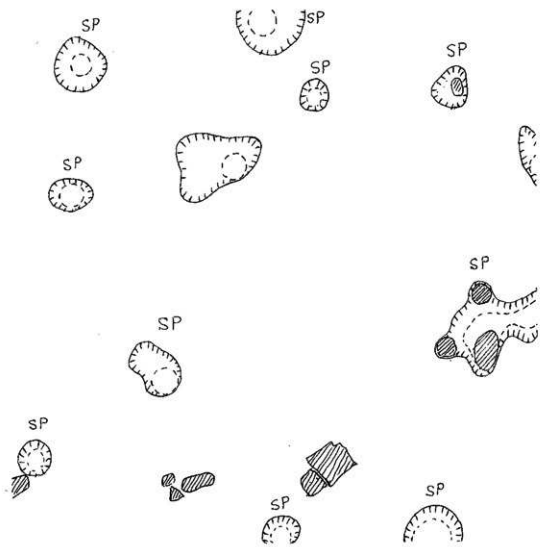
#### 4. 調査の概要

##### (1) 調査の方法

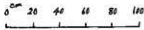
当調査では、南北に通ずる山道に沿って南北の基線を設ける。南北の基線から、畑作業時に石器や土器等を特に多く採集した分布の密集地域に巾(南北)4m、長さ(東西)70m1本と40m3本のトレンチを設定し、遺跡の北側から第一区、第二区、第三区、第四区に分

第4図の1 住居跡平面図

Ⅲ の 3<sub>1</sub> (深さ 55cm)

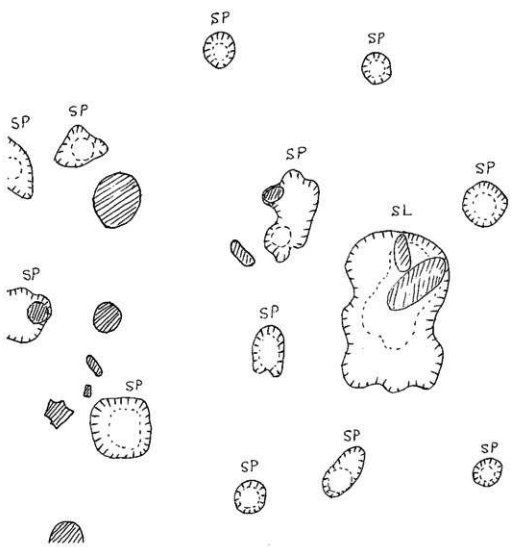


● 礎  
○ 最深凹形部

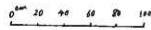


第4図の2 住居跡平面図

Ⅲ の 3 (深さ 55cm)



● 礎 ○ 最深凹形部



ける。

粗掘にあたって各坪ごとに20cmの畔を設けて土層の観察を図ることにし、各区ごとに偶数、奇数と1坪置きに粗掘を行い、遺構・遺物の早期発見をはかり、発見した場合はそれを中心にして拡大する方法をとったのである。一区の3, 4, 5の各坪を南に4m拡大して発掘精査、三区では3を拡大し3', 8, 9, 10を南に拡大して8', 9', 10'を発掘精査を行った。

## (2) 出土した遺構

降雨のため作業が思うにまかせず、9月2日に至って三区の3からピット群が見つかったので、更に4m南に拡大掘を行ってピット群を発見する。三区の3は粗掘の段階で大礫の据石があり、近くに多数の石器片が出土したのである。地山に達し、黒く焼けた土と多数の木炭片を包含する炉跡らしいものが見つかった。これを中心にしてピット群が現われた。三の3'も三の3から続いた土壇が発見され、更に環状にピットが出土した。三の3を東に拡大することにし、3の2を粗掘したところ表面より30cmに達して第一層の文化層が見つかり、炉を中心としたピット群が発見された。

なお三の8, 9, 10及び8', 9', 10'からもピット、炉の出土が期待される。石器片群、土器片群が発見されている。一区の5からは、露天焼の炉の大規模な焚き口らしいものが出土し、この付近から多量の土器片群、石器片群が二層に分かれて出土したところから近くに住居跡も期待される。

## (3) 出土した遺物

遺物の出土状況を見ると、まず表面いたるところに石器の剝片が採集され、発掘中はひとシャベルごとにカチッと音がして剝片や礫石器が採集されるほど濃密である。土器破片は発掘当時、土層試掘の際四区の2の南1mの地点から平行した2本の隆帯丈で山形の連続丈をもつ破片で2個出土したが、各区の発掘に入ってからあまり期待したほどの出土を見なかった。

一区の5の発掘が30cmに達して土器の堆積群が5ヶ所見つかるようになり、更に第2回の一区の偶数坪のうち4坪になると同じ深さに達して、またまた土器群が一区の5に接して出土した。一方、三区の10及び10'の発掘が進むにつれて土器群が4ヶ所に現われている。一区からは更に4', 5'を拡大発掘した際にも多くの土器堆積群を発見した。

石器の出土状況は段丘表面近く、約20cmと40~50cm及び地山表面において特に採集密度が大であり、剝片はいちじるしく、また完品も相当数にのぼった。礫石器も非常に多く、石皿(大型・小型)、石棒、球状のもの、丸い平板状のもの、すり石、凹み石、三角形の細長いものや三面、あるいは二面、あるいは一面をすられたものが多く出土した。石棒の中に、半分に折れているものが多い。更に、いたるところ自然の礫が多く出土し、土器、石器片の多く出土する地点に密集していた。火山灰土の中に川原の礫の分布は不自然であり、この礫は何かに使われたものであり、この点に関しては研究する必要がある。

完全な打製石器には石鏃、石槍、石匕、石篋、円形石器、石斧、石錘など多数出土し、また磨製のものとして石斧が若干と極細石器の針状のものが1本出土した。裝飾用石器としては、ペンダント風の正方形の磨製板状の石器が1個と半分に割れたものが1個、また鉄石英に加工した曲玉状の飾石が1個現われている。なお石核が多く出土し、割合に大型の古い粗製石器と考えられるものが多く出土した。

## 5. 調査のまとめ

異常気象をまともにうけ雨天の日が多く、作業途中の降雨などで作業の中止や変更が多く作業が思うにまかせなかった。遺構の発見が少なく、しかも作業期間の終りに近づいて発見されるなど期待どおりにゆかず残念であった。しかし7万㎡の遺跡範囲のうちわずか600㎡の発掘ではあったが、いちじるしい石器、石器片の採集、また当初第木6式(今から5,000年前から4,500年前)に属すると想定されたが、それより更に古い第木5式(今から5,000年前から6,000年前)の古い土器片の出土は、この遺跡の重要性を秘めていることを物語るものと思われる。

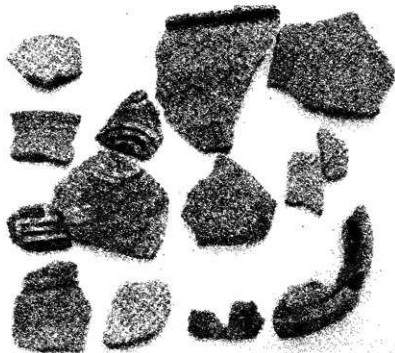
次に発掘中に気付いた点を箇条書にすると、

- 1) 居住跡の側壁の発見は至難の業であり、特に黒ボクの中はむずかしい。
- 2) 黒ボクの中に出現する異色の土の意味することを、どうとらえるか。
- 3) 火山灰土の中に、はなはだしく分布する礫をどう考えるか。この研究は極めて大切である。
- 4) 石棒が非常に多く出土した中で、断面が三角形のものが多く各面を磨いたものもあり、しかも大部分が折れている。
- 5) 凹石が多く磨面のももあり、また円盤状の石器も多い。
- 6) 球状の石が多く出土した。大小のものがあり、炉と思われる近くからよく出土した。
- 7) 大型の石核や剝片が意外に多く、粗製の礫石器と思われるものが多く出土した。
- 8) 石器の大部分は硅質頁岩であるが、鉄石英、めのう、黒曜石などもある。ただ玉川遺跡に近いわりに黒曜石が少ないのは、交流がなかったことを物語るものなのか？
- 9) 石錘は出土しないものと思っていたところ1個出土した。

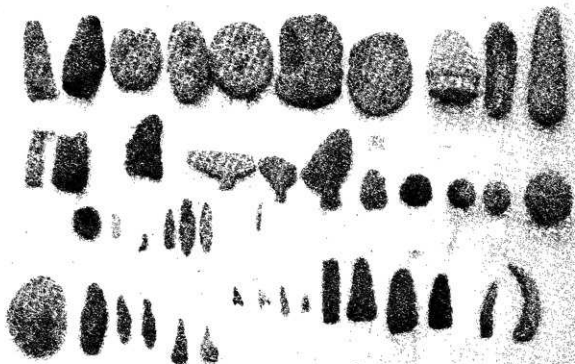
今回の緊急発掘調査は遺跡面積の10分の1にも満たない面積でありながら、現在居住跡3ヶ所、その他出址数ヶ所、遺物の石器に至っては数十箱に達し、また土器は完品の出土がなく土器片の出土も石器の5分の1にすぎないが、時代決定に重要な鍵をにぎる文様型式のものが出土したことは当遺跡の重要性を語る証査に考えられる。

今後3年も経過すればこの遺跡の3分の1は平地となり、いにしへの原形は消滅してしまふことになる。予算やその他の条件で全面調査できないことがなによりも残念であり、まことに惜しいことである。

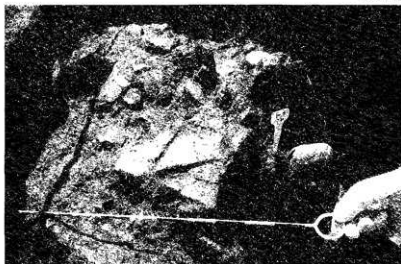




▲ 出土した土器



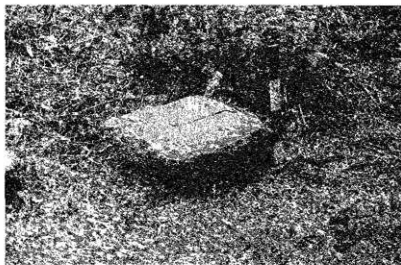
▲ 出土した石器のいろいろ



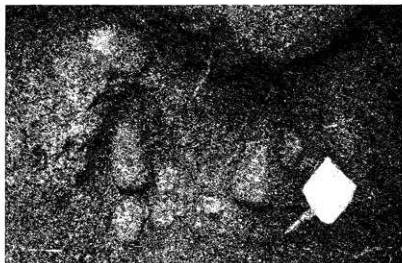
◀ 土器の出土状況 ①



◀ 土器の出土状況 ②



◀ 出土した大石皿



◀ 石器の出土状況

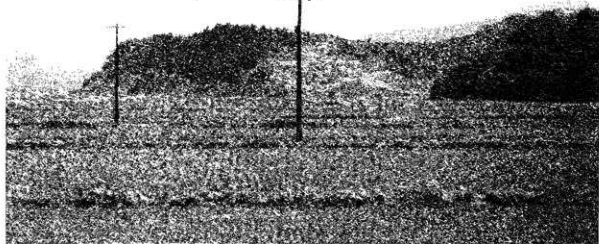


◀ 住居跡の出土状況 ①



◀ 住居跡の出土状況 ②

図版 4



▲ 遺跡の遠景